

# マイノング主義論理におけるボトムアップの観点

A Bottom-up View on Meinongian Logics

小関 健太郎

## Abstract

Inspired by Meinong's object theory, which is known for recognizing non-existents as genuine objects, Meinongian logics (semantics) are in a particular position between logic and ontology. Neo-Meinongian approaches of Meinongian logics are largely motivated by the need for accounting for the semantics of natural language and intentionality; while the approaches can be characterized in terms of the restrictions imposed on their Comprehension Principles, there are some problems concerning the relationship among them. In contrast to the conventional Neo-Meinongian "top-down" view, I set forth a "bottom-up" view on Meinongian logics, in which the kinds or types of objects are focused primarily so that the corresponding logics and their relations can be investigated and integrated in a piecemeal fashion.

## 1 研究テーマ

### 1.1 「論理と存在論」の問題圏におけるマイノングの対象論

アレクシウス・マイノングは、彼の対象論 (Gegenstandstheorie) を通じていわゆる非存在対象を真正の対象として認める立場を擁護したことで知られている。しばしば論点となるように、この理論はひとつの帰結として、空名辞や矛盾した記述を含む指示的表現などをそれに対応する非存在対象を指示するものとして説明することを可能にしている。影響力を持った 1905 年の論文「表示について」においてラッセルは、フレーゲの理論と合わせて「マイノングの理論」を——対象論を取り上げ、そうした理論はそれ自体「困難のある立場 a difficult view」であり、しかも実際にいくつかの矛盾が導かれる指摘し、その上で記述の理論によって問題が回避されることを示した。記述の理論によるマイノング的理論の克服という考え方はクワイインによっても受け継がれ、その後のメタ存在論研究のいわば「標準見解」の一部をなしていった [1, Ch. 3]。ラッセルやクワイインの議論において対象の指示 (表示) の問題が論理学の意味論的な問題に関わっているように、こうした展開は論理と存在論の関係をめぐる問題圏のうちに位置づけることができる。

マイノング自ら対象論的論理学 (gegenstandstheoretische Logik) について論じているように、マイノングにとっても対象論は論理学と密接な関係にあつた [6]。ラッセルの批判以後、いくつかの契機を経てマイノングの対象論に着想を得た論理は再び注目を集めることになり、これらの諸体系はマイノング主義意味論やマイノング主義論理と呼ばれている。

本稿ではまず、こうしたマイノング主義論理の成立と展開を整理し、現代的なマイノング主義論理に伴っている固有の観点とその課題を指摘する。その上で、マイノング主義論理に対する別の見方としてボトムアップの観点を提示し、課題に対する見通しを与える。

## 2 研究の背景・先行研究

### 2.1 マイノングの対象論とラッセルによる対象論批判

マイノングの対象論のひとつの眼目は、対象概念を対象の存在や非存在によって限界づけずに「諸対象の全体」を探究することであり、このことは伝統的な意味での存在論との対比において特徴づけることができる。すなわち、存在者の学としての形而上学や存在論において「対象」はさしあたり存在者と同一視されるが、対象論において「対象」は存在者に限られず、その範囲は存在しないものにも拡大される。これによって、ペガサスのような虚構的対象や円形の四角形のような矛盾した対象も非存在対象として、対象というカテゴリーの下で実在の対象と対等に考慮されることになる。この立場は、存在論的カテゴリーなどを扱う存在論的な議論に対して、存在概念自体、また存在論や存在論的な学問についての議論や主張であるという意味でメタ存在論的な主張である。

冒頭で述べた通りこの立場は、空名辞も含め対象の指示を一様な仕方で説明する可能性を与えるが、ラッセルの指摘するこの考え方の問題点は次の2点に整理できる。ひとつは矛盾の問題であり、例えば「円形の四角形」という名辞の指示対象について、それが円形であることと円形でないことが成り立つことになるが、これは無矛盾律に反する。もうひとつは存在論的身分の問題であり、例えば「存在するペガサス」が記述通りの対象であればそれは存在することになるが、われわれは任意の対象の存在を自由に操作することはできない<sup>1</sup>。後に具体的に取り上げるように、こうした問題を回避可能なラッセルの代案がいわゆる記述の理論である。記述の理論は広く受け入れられ、1948年のクワインの論文「何があるのかについて」における存在論的コミットメントの議論でも敷衍され影響力を保つことになる。

### 2.2 マイノング主義論理の展開

一方でラッセルの批判の直後から、指摘された問題点に対処しうる存在論的・論理的なテクニックの発展が進み、対象論のアイディアを取り入れた論理を実現する試みもなされてきた。内的否定(述語否定)と外的否定(文否定)の区別、多値論理、自由論理などはその例であり、こうしたテクニックを基盤に、1980年前後には現代的なマイノング主義論理としていわゆる新マイノ

ング主義の諸理論が登場してきた。

なかでも自由論理は、新マイノング主義の諸理論に共通する重要な構成要素のひとつとして挙げができる。自由論理にはいくつかの構文論と意味論が提案されているが、マイノング主義的な自由論理として、2種類の量化子の組、すなわち内的量化子 ( $\exists, \forall$ ) と外的量化子 ( $\Sigma, \Pi$ ) を持つものが考えられる [8, pp. 1028f.]。この体系において、例えば内的特称量化子  $\exists$  は外的特称量化子  $\Sigma$  と存在述語  $E!$  を用いて  $\exists x\varphi =_{df} \Sigma x(E!x \wedge \varphi)$  と定義され、存在量化子としての内的特称量化子の「存在」へのコミットメントが明示化されることでコミットメントを含まない外的特称量化子  $\Sigma$  とは区別されることになる。

### 2.3 新マイノング主義のモチベーション

ここで指摘しておきたいのは、新マイノング主義の多くの議論が共有する特有のモチベーションである。マイノング主義の諸理論が「自然言語の意味論と心の志向性理論の基礎」[10, p. 516] を与える試みであるとも述べられているように、新マイノング主義の取り組みの動機の基調をなしているのは自然言語や志向性の形式的な扱いを可能にするような論理の構築である。

自然言語や志向性に関する具体例として、「信じる」という志向的動詞を含む「マイノングは円形の四角形 (the round square) は円形であるということを信じていた」(1) という文を考えてみよう [4, §4]。ラッセルの記述の理論の方法を単純に適用した場合、この文は例えば「 $\exists!x (x$  は円形の四角形であるかつマイノングは  $x$  が円形であると信じていた)」のようにパラフレーズできるが、円形の四角形が存在するわけではないのでパラフレーズ後の文は偽である ( $\exists!$  は一意的な存在量化子)。しかしながら元の形である (1) は実際には真なので、このパラフレーズは成功していないことになる。これに対して、マイノング的な指示理論によれば「円形の四角形」という記述は円形の四角形という非存在対象を指示するだけなので、パラフレーズなしに直接説明を与えることができる。

### 2.4 包括原理による対象論解釈と分類

このようなモチベーションのもとで、自然言語の意味論や志向性の問題は「表示について」以来の指示の問題と重なることになる。マイノング的な指示理論を形式化するストレートな方法は、「表示について」におけるラッセル的な対象論解釈を、「無制限の包括原理 (Unrestricted Comprehension Principle, UCP)」、つまり任意の文についてそれを満たすような対象を保証する次のような公理図式として再構成することである<sup>2</sup>。

(UCP) 任意の文  $\varphi$  について、 $\Sigma x\varphi$

しかしながら、ラッセルの指摘の通り (UCP) はいくつかの問題を生み出す。そこで、なるべく寛容さは保ちつつも (UCP) に制限を加えた包括原理を与えることが求められるが、ここで (UCP) をどのように制限して寛容な包括原理を実現するかによってマイニング主義論理の分類が可能であり、代表的なものとして 3 つのアプローチを挙げることができる [1, pp. 110ff.]。

(二性質アプローチ) 核性質/核外性質のような 2 種類の性質の区別に基づいて包括原理 (以下 CP) を制限する (NCP)

(二繋辞アプローチ) 性質の例化/エンコードのような 2 種類の述定の区別に基づいて CP を制限する (DCCP)

(様相アプローチ) 可能/不可能世界についての様相的量化に基づいて CP を制限する (QCP)

問題となる帰結に対して、例えば二性質アプローチでは対象の「特徴」を構成するような性質 (核性質) と、存在や可能性のような様相的な性質などそれ以外の性質 (核外性質) とを区別し、穩当な制約として CP が核性質についてのみ成立つことを認めることで存在論的身分の問題が回避される。

### 3 筆者の主張

#### 3.1 新マイニング主義における「トップダウンの観点」とその課題

前節の最後では、CP の制限の方法という点でマイニング主義論理におけるいくつかのアプローチが区別されることを述べた。ここで重要なのは、前節で述べた経緯から、どのアプローチを取るにしても新マイニング主義の諸理論は——指示の理論の問題から出発して——寛容な包括原理の実現を主な関心としているという点である。このような、寛容な包括原理の実現としてマイニング主義論理を特徴づける仕方をここではトップダウンの観点と呼ぶことにする。

新マイニング主義におけるトップダウンの観点の課題として本稿で提起したいのは、この観点のもとでの各アプローチの内実と関係の問題である。まず内実の問題として、種々のマイニング主義論理ではさまざまな種類の対象が導入されるが、トップダウンの観点ではこれらの諸対象は各アプローチの道具立てに依存して定式化されている。すなわち、各アプローチの CP は、そのアプローチによる理論の枠内において非存在対象などの「マイニング主義的」対象のすべてを一挙に (アプローチによっては通常の対象も合わせて) 対象領域に導入する。一方で議論のこの段階では、その「すべて」の内部で内

実として具体的にどのような対象が導入されるのかは明らかではなく、実際この内実は非存在対象や不可能対象等々についての個別の議論によって説明されることになる。しかしながら、こうした個別の議論が CP によって導入された対象の説明をどの程度尽くしているのか、そしてその CP によって導入されていない対象があるのか、あるのであればそれはどのようなものなのか、という点は明らかではない。

このことはもう一つの、関係の問題においてより具体的に述べられる。例えば不可能や不完全対象は多くのマイニング主義論理で取り上げられる対象である。しかしながら、各々のアプローチの枠内で説明されるそれらは、同一の意味で不可能な、あるいは対象として同一な不可能対象なのだろうか？論理的に不可能な非四角形の四角形と物理的に不可能な永久機関がその不可能性に関して区別しうるよう、「不可能対象」は必ずしも一義的ではなく、また不可能対象は常に同時に抽象的対象であるかどうかといった別の側面で異なる特徴づけを伴っている場合もある。また、トップダウンの観点ではどのようなアプローチが (UCP) の「適切な」制限であるかが論点であるため、各アプローチは主に問題点において比較され、両立性という点での相互関係はほとんど積極的な関心にならない<sup>3</sup>。

こうした課題を念頭に以下で概略を示したいのは、トップダウンの観点とは異なるマイニング主義論理の方法論として、ボトムアップの観点を導入することである。

### 3.2 ボトムアップの観点の導入

ボトムアップの観点の基本的なアイディアは、対象領域への新しいタイプの対象（または対象のタイプ）の導入と、それによる対象領域の構成あるいは拡張としてマイニング主義論理を特徴づけることである。

こうした方法論は、関連研究においても部分的に見い出すことができる。第一に、マイニングの対象論それ自体が最も重要な源泉として挙げられるだろう。マイニングは対象論をいくつかの仕方で特徴づけているが、存在論の拡張としての対象論の特徴づけは、まず実在的対象の領域からイデア的対象を含めた領域への拡大から出発し、さらに進んで非存在対象やその下位区分へと拡大される形で論じられている [5]。新マイニング主義のうちでボトムアップの観点に特に接近しているのは [12] で再検討されているシルヴァンのアイテム理論 (item theory) であり、CP に代わる「公準」(postulates) などによる対象の導入と、それに応じた対象領域の区分けという方向性のもとでトップダウンの観点の延長線上にあるものの、ボトムアップの観点同様に特定の CP によらず対象の導入を認めることができると主張されている。

「対象の全体」という対象論的な見取り図を共有しつつも、全体そのものをカバーする (UCP) をどのように制限するべきかが論点となるトップダウンの観点に対して、ボトムアップの観点では対象の様々なタイプに応じてその特徴づけを与え、それらを関係づけていくことで構成的に全体をカバーすることが目指される。重要な点として、ボトムアップの観点はトップダウンの観点と排反なものではない。そこで以下ではボトムアップの観点の具体的な適用として、先に挙げたトップダウンの観点における内実と関係の問題を取り上げる。

### 3.3 マイノング主義論理の構成要素

まず内実の問題に関して、対象のタイプを関心とするボトムアップの観点において注目されるのは、既存のマイノング主義論理においてどのような対象のタイプが扱われているのかという点である。実際にさまざまな対象のタイプが先行研究から収集されるだろう——非存在対象や不可能対象、志向的対象、抽象的対象、また不完全対象などのギャップ対象はその例である。

このうちギャップ対象 (gappy objects) を取り上げよう。ギャップ対象は、その対象についての文 A について A も A の否定も成り立っていないような対象である。例えばシャーロック・ホームズという人物は、「シャーロック・ホームズは背中にほくろがある」もその否定も成り立っていないという点でギャップ対象として考えることができる [9, p. 183f.]。二性質アプローチや二繋辞アプローチのもとでは、ギャップ対象は基本的に外的否定と内的否定や述定の区別を利用して矛盾対象と実質的に同じ仕方として導入されている (cf. [9, p. 106])。これに対して、CP の制限方法に依存せずギャップ対象そのものに注目した場合、他の仕方でギャップ対象を導入することもできる。例えば、[11] はある種のギャップ対象であるマイノングの不完全対象に言及しつつ、ギャップ対象の論理について異なる形式化を与えている。また、否定を区別するのではなく加法的選言と乗法的選言のように 2 種類の選言を区別することや、超付値 (supervaluation) のような方法も候補となる。場合によってはこれらはギャップ対象の異なる導入の仕方というより、ギャップ対象というタイプの細分化でもありうる。

### 3.4 非対立的なマイノング主義論理

この延長線上において、マイノング主義論理の各アプローチがどのような関係にあるのかという関係の問題にも見通しが与えられる。トップダウンの観点の問題として、この観点ではあくまでどのようなアプローチが (UCP) の「適切な」制限であるかが論点であるために各アプローチの相互関係が積極的な関心にならないことを論じたが、ボトムアップの観点では各アプローチが

導入する対象に注目してアプローチ間の関係を調べることができる。

例えば、(NCP) と (DCCP) を比較することを考えてみよう。比較のひとつ の方法は、あるタイプの対象に注目し、それが各アプローチの CP によって導 入される対象のうちに含まれるかどうかを比較することである。実際、(NCP) と (DCCP) によって導入される対象のタイプには、ギャップ対象のように実 質的に重複するものもあれば、(DCCP) を採用する [13] における「抽象的 対象」のように一方に固有のものも見られる。こうした比較を通じて、それ ぞれの CP のカバー範囲の重複や差を含め、CP の位置付けや相互関係を調べ ることができる。関連して [12] は、(QCP) と同様の現実世界とその他の世界 の（意味論的な）区別の下で、その他の世界に存在する対象を現実世界へ非存 在対象として取り込む方法として (NCP) のような CP を用いることができ ることを指摘している。

#### 4 今後の展望

新しい観点を導入してマイノング主義論理を再検討することは、論理と存 在論の両側面でさまざまな対象についてより柔軟な分析を可能にする。ここ では「より柔軟な分析」の内実に関して二つの展望を述べておきたい。

ひとつは、マイノング主義論理というプロジェクトの内部における諸対象 の分析であり、この点については、種々の理論によって定められる対象領域 の間の関係や、複数の CP の間のメタ的な関係など、新しい観点によって可 能になるさまざまな問題設定が [12] において近い立場から素描されている。

もうひとつは、マイノング主義論理をより広い文脈に位置づけることによ るものである。マイノング主義論理はこれまで必ずしも十分に他の論理との 関係の面で考察されてきていないが、ボトムアップの観点によってマイノン グ主義論理を部分的に取り上げることが可能になることで、すでに自由論理 や矛盾許容論理といった側面に関してある程度なされているように、より広 い哲学的および数理論理学の文脈における考察を通じて、マイノング主義論 理内外のいわば相互交流が実現されることが期待される。

#### 注

<sup>1</sup> 現実にはペガサスは存在しないことが成り立っているので、ラッセルは この問題も矛盾の問題として扱っているが、この問題は無矛盾律に依存しな い。他にも関係に関する問題が挙げられる [2]。

<sup>2</sup>[1, p. 108] に従う。シルヴァンらはほぼ同じ意味で特徴づけ原理 (Characterization Principle) という語を用いている。

<sup>3</sup>[3] は二性質アプローチと二繋辞アプローチの関係についての論争を反映しており、論争に関わる論文と合わせて、批判的ではあるが相互関係についての考察を含んでいる。

## 文献

- [1] Berto, F. & Plebani, M., 2015. *Ontology and Metaontology*. Bloomsbury.
- [2] Griffin, N., 2009. “Rethinking Item Theory”. *Russell vs. Meinong: The Legacy of “On Denoting”*. Routledge, 204–232.
- [3] Jacquette, D., 1997. “Reflections on Mally’s Heresy”. *Axiomathes*, 8(1), 163–180.
- [4] Marek, J., 2013. “Alexius Meinong”. In: Zalta, E. N. (Ed.). *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2013 Edition), URL=<<https://plato.stanford.edu/archives/fall2013/entries/meinong/>>.
- [5] Meinong, A., 1904. “Über Gegenstandstheorie”. In: *GA II*, 481–530.
- [6] Meinong, A., 1910. “Erstes Kolleg über gegenstandstheoretische Logik”. In: *GA Ergänzungsband*, 209–236.
- [7] Meinong, A., 1969–1978. *Gesamtausgabe*. Akademische Druck- und Verlagsanstalt. [=GA]
- [8] Nolt, J., 2005. “Free Logics”. In: Jacquette, D. (Ed.) *Philosophy of Logic*, Elsevier, 1023–1060.
- [9] Parsons, T., 1980. *Nonexistent Objects*. Yale University Press.
- [10] Rapaport, W. J., 1991. “Meinong, Alexius I: Meinongian Semantics”. In: Burkhardt, H. & Smith, B. (Eds.). *Handbook of Metaphysics and Ontology, Volume 2*, Philosophia, 516–519.
- [11] Santambrogio, M., 1990. “Meinongian Theories of Generality”, *Noûs*, 67, 21–36.
- [12] Sylvan, R., 1995. “Re-Exploring Item Theory. Object Theory Liberalized, Pruralized and Simplified but Comprehensivized”, *Grazer Philosophische Studien*, 50, 47–85.
- [13] Zalta, E. N., 1983. *Abstract Objects*. D. Reidel.

(慶應義塾大学)